

災害ごみを高速処理

崇城大チーム新技術

バスタブ分解、わずか2時間

崇城大工学部（熊本市西区）の研究チームは、再利用が難しく、ほとんどが埋め立て処分されているというガラス繊維強化プラスチック（FRP）の新しい処理技術を開発し、実用化を目指している。従来よりも3〜6倍のスピードで分解でき、熊本地震で発生した災害ごみの処理に向け、期待が寄せられている。

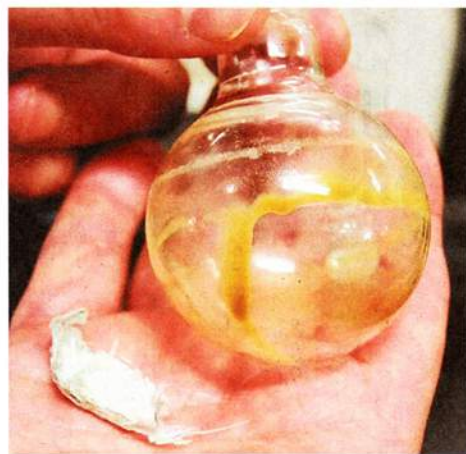
（河津佑哉）

FRPは網目状の分子構造で、強度が高い。研

究チームの池永和敏准教授と、新技術では、FRPに電子レンジで使うマイク



被災地から回収したバスタブを手に「早く実用化させたい」と意気込む池永准教授



FRPを分解したガラス繊維（左）と容器に入った液体状のプラスチック

口波を照射し、加圧して高温にすることで、化学反応を起こさせる。その結果、分子のつながりが切断され、ガラス繊維と液体状のプラスチックに分離するという。

これまでの処理は、加圧や溶解で6〜12時間かかっていたが、新技術は2時間で済む。特殊なアルコールを加えることで、新しくFRPとして再利用することもできる。

2011年の東日本大震災では、FRPの漁船やバスタブといった多くの災害ごみが発生。大半は埋め立て処分されたという。

池永准教授は「科学の視点で、熊本地震からの復旧・復興に貢献したい。一日も早く被災地で役立てられるよう、研究を急ぎたい」と話している。

池永准教授は「科学の視点で、熊本地震からの復旧・復興に貢献したい。一日も早く被災地で役立てられるよう、研究を急ぎたい」と話している。